

消え行く反抗期

中学生の八割が親との関係は円満だと考えている反面、この世代に特有の「反抗期」の傾向が失われている実体が教育シンクタンク“ベネッセ未来教育センター”の意識調査から浮かんだ。

調査をまとめた深谷昌志(東京成徳大学)子供学部教授は「一見好ましい結果に見えるが、子供が親に依存し続けて精神的な自立が遅れている。社会全体で見ると心配な結果だ」と指摘している。

親とうまくいっているか？

対父親	YES	77.7%	NO	22.7%
対母親	YES	87.4%	NO	12.6%

家での気分は？

のびのび出来る	YES	84.2%	NO	15.7%	無回答	0.1%
孤独	YES	84.8%	NO	84.8%	無回答	0.1%

調査は今年2月関東の中1～中3生1355人を対象に行われた。上記以外に親との会話は“父親とよく話す”が26.7パーセント、“母親とよく話す”が54.9パーセント。“親は自分を理解している”と答えたのは70.6パーセント。“今と同じ家庭に生まれ変わりたい”が46.6パーセントが“生まれ変わりがたくない”21パーセントを大きく上回り、親を肯定的にとらえ、円満な家庭に満足している様子が目に浮かぶ。

この結果について深谷教授はこれが小学生高学年の調査ならまったく問題ないのだが、中学生になると、親に依存していた子供は親を疎ましく感じたり目障りに感じたりするもので、反抗期固有の傾向がうかがえない。これは高校生の調査でもみられる傾向だ。『家庭円満なことを否定する必要はないが、反抗期には子供が精神的に自立する上で不可欠な過程だ。大人になっても親元を離れない“パラサイトシングル”などの減少と無関係と思えない。反抗期が消え、緩やかに成長するスタイルが定着したともいえるが、反抗期を持たない子供がどう自立するのか心配だ』と話した。

産経新聞より抜粋